

2022. 5. 19

Report from AKATSUKA PARK

赤塚公園武蔵野台地崖線植物モニタリング活動

5/19 臨時活動

「赤塚公園ハルジオン物語」

なぜハルジオンを抜き取るのか？



もともとは観賞用に愛された

ハルジオンはキク科の多年生草本です。今の季節は、街中の空き地でも背丈を伸ばして花を咲かせています。花の色は蕾の時は薄紫色で、花が開くと白色が基本ですが、上の写真の左は都立高島高校の南側フェンス際で観られたハルジオン。すごくきれいです。漢字で書くと「春紫苑」<春の紫の庭>という意味ですから、人々から愛されてきたに違いありません。

赤塚公園では徳丸ヶ丘緑地地区でも沖山地区でもいたるところにこの花が咲いていて、一面真っ白になっています。中には、上右の写真のようにきれいな色をしたものも見つかります。直径1.5cmらしいの小さな花ですが、これをそのまま直径10cmに拡大すれば菊花展に出品できるほどのもの。

それもそのはず、このハルジオンは大正時代に花を鑑賞するためにわざわざ外国から持ってこられた植物だということです。(注：ハルジオンによく似ていて開花時期が夏から秋の種にヒメジオンがあります。こちらを漢字で書くと「姫女苑」。これはひとつ前の明治時代に、やはり観賞用として移入されたと言われています)。



野生化したら繁殖力が強すぎで他の野草の妨げになってしまった

しかし、菊の花は園芸用に年々改良を加えられて、立派なものが造られていく一方で、当初はもてはやされていたハルジオンは人々から見捨てられるようになってしまいました。ところが、この植物、繁殖力がすごいのです。野生化して、そこら中に生えるようになりまして。背丈が高いの

で、この植物が密集して生えていると地面に光が届かないためにほかの植物が生育しにくく、近年は「雑草」の代名詞のように扱われ、また、自然界の生物多様性を妨げる植物として、排除の対象にされてきています。人間が持ちこんだものなのに、その人間が見捨てる身勝手さ。ハルジオンにとっては「いい面の皮」でかわいそうです。だから、無条件に全部退治してしまえというのも、どうかと思うのですが、赤塚公園の武蔵野台地崖線は昔の武蔵野の林や草原のようにたくさんの植物が元気に共存できる環境づくりが必要なので、ここではご遠慮対象とせざるを得ないのです。

観察目的の活動でも、必要に応じて林と草原の手入れ活動を実施



都内最大のニリンソウ自生地がある都立赤塚公園で、そのニリンソウ保護活動は今年で40周年になります。でも、上の赤塚公園の全体マップを見れば分かるように、ニリンソウ自生地は実はごく一部分（赤矢印部分）にしか過ぎないのです。ニリンソウ保護活動は最大の自生地でニリンソウのお花畑を保存することを目的にしてきたわけではありません。ニリンソウが咲く環境とはそのほかの植物、昆虫や野鳥などのすべての生き物が生きやすい環境であって、その環境を残すことを目的として活動を続けてきたので、この東西2.5kmにわたって延びている武蔵野台地崖線の全体を緑豊かな林と林縁（林のふちの半日陰や日当たりがよい草原）として残していくことが必要だと考えてきました。

保護活動は大門地区のほかに城址地区でも2つの団体が行っていますが、大切に保護したい植物は沖山地区以東の各エリアにもたくさん残っています。そこで、もともとは植物を観察して記録を残すための活動としてスタートした「赤塚公園植物モニタリング活動」も、必要に応じて手入れ活動を行うようになりました。5/19は臨時活動として沖山地区の生物多様性保護エリアで白い花を咲かせて広がっているハルジオンの抜取り作業を行ったというわけです。

抜いた後の地際からヘビイチゴやミズヒキ、ナガミタンポポが顔を出してきました。アズマネザサも姿を現してきたので、次はこの刈り取りも課題になります。



●植物モニタリング活動5月は終了 6月は6/6、6/13、6/20 9:00 ため池公園

●赤塚公園ニリンソウを守る会 6月例会 6/12 10:00 大門広場

ゲーム感覚で出来る植物調べと簡単な手入れ

★いずれも、飛び入り参加歓迎！ 雨天は小雨でも中止

<問合せ：赤塚公園サービスセンター03-3938-5715>